

第3回

有吉佐和子文学賞 入賞作品集



有吉佐和子愛用の万年筆

和歌山市では、有吉佐和子記念館の開館を契機に、本市の偉人である作家・有吉佐和子の顕彰に加え、文学について学ぶ機会を提供すること及び本市の文化的風土を醸成することを目的として、令和五年十二月に、塚本治雄基金を活用させていただき、有吉佐和子文学賞を創設しました。

本文学賞では、有吉佐和子のように一つのテーマにとらわれることなく、自分自身のこと、世の中のこと、和歌山への想いなど、思ったまま、感じたままに表現したエッセイを募集し、第三回目の今回は、全国から一三・四作品の応募をいただきました。

本文学賞が、多くの皆様方に創作の喜びや楽しさを感じていただき、有吉作品をはじめとする「文学」の魅力に触れていただく一助になれば幸いです。

ふるさと和歌山のような温かい、そして末永く愛される文学賞となることを願います。

和歌山市

有吉佐和子と和歌山市



有吉佐和子（1931－1984）は、昭和6年1月20日に和歌山市に生まれました。海外でも幼少期を過ごし、8歳で帰国した際に見た青い紀の川の美しさに感動し、20年後に小説「紀ノ川」を発表。

他にも「助左衛門四代記」「華岡青洲の妻」など、ふるさと和歌山を舞台とした多くの作品を著しました。

また、社会派小説「複合汚染」「恍惚の人」や歴史小説「和宮様御留」、ミステリー「悪女について」「開幕ベルは華やかに」など、創作活動は幅広いジャンルに及びました。

さらに、その多才ぶりは小説にとどまらず、ルポルタージュや演劇の脚本・演出等広く才能を発揮し、いずれの分野においても高い評価を受け、一時代を築きました。

目次

最優秀賞	「コンプレックスとチャームポイント」	千葉県茂原市	千葉敬愛高等学校二年	小高 桃子	…… 4
優秀賞	「まんまるの夜」	東京都新宿区		秋元 勇作	…… 8
佳作	「小洒落たコーヒー屋さん」	埼玉県三郷市		田村 奈実	…… 12
	「アイの起源」	神奈川県平塚市	聖光学院高等学校一年	中川 泰明	…… 16
	「残香―ブルースト、お前か」	愛媛県伊予郡松前町		原 徹	…… 20
	「十月二十五日の筑前煮」	東京都品川区		播磨 賢	…… 23
	「バスとバス」	和歌山県和歌山市		松尾 寛	…… 27
奨励賞	「台所の時間」	東京都練馬区	光塩女子学院中等科三年	伊藤 光映子	…… 30
	「小さなカップケーキが教えてくれたこと」	東京都多摩市	晃華学園高等学校二年	稲村 瑠華	…… 33
	「お兄ちゃんの意地」	千葉県四街道市	千葉敬愛高等学校二年	大久保 まこ	…… 36
	「姉の叫び」	大阪府大阪市	大阪教育大学附属天王寺中学校二年	出島 せいな	…… 38
	「普通じゃないけれど」	愛知県岡崎市	緑誠蘭高等学校サテライト知立校一年	仲 陽菜子	…… 41
	「足の指と人の話」	東京都中野区	光塩女子学院中等科二年	向井 こなつ	…… 45

※ 学校及び学年は応募時点のものです。

第3回

有吉佐和子文学賞

入賞作品集

「コンプレックスとチャームポイント」

小高 桃子

今、高校生である私の髪には、ひと束の白髪がある。

「尋常性白斑ですね。完全に治ることはないです」

数年前、当時小学生だった私に、皮膚科の先生は冷たく言い放った。

ある朝、鏡を見ると、頬の肌と髪が少し白く色が抜けていた。驚いて、すぐに母を呼んだ。そして、急いで皮膚科へ向かった。

長い長い待ち時間の末、下された診断は、尋常性白斑だった。

「治らないんですか」

私は、泣きそうになりながら先生に尋ねた。

「治療で進行を遅らせることはできますが、完全には戻らないでしょう」

幼いながらに絶望した。治らない病気にかかってしまった。これから、さらに色が抜けていく。黒いドロドロしたものを頭からかけられているようだった。

その日の夜は、眠れなかった。

それでも、また朝が来て、私は学校へ行かなくてはならなかった。周りの人たちに、変に思われたらどうしよう。などと悪い考えが頭をちらついた。しかし、予想に反して、誰も私の病気について触れる者はいなかった。

それからしばらくは、私も病気のことには気にしていなかった。しかし、中学校に入学する時、私はまた尋常性白斑に悩まされた。

中学校では、校則で、髪の色や染色が禁止されていた。だから、どうしても私の髪色は目立ってしまう。

入学前、美容院へ行き、美容師さんに、できるだけ、シラガは隠してほしいとお願いした。その甲斐あってか、私の髪色について誰も何も言わなかった。いや、きっと、自分が思うほど他人は私を見てはいなかったのだろう。とはいえ、それに気がつけるほど、当時の私は大人ではなかった。

中学校に入学してから数ヶ月、私は友人についてしまった。

「シラガが多くなって、もう隠しきれないんだ、黒く染めた方が良いのかな」
すると、友人は急に真剣な顔になって言った。

「シラガなんて言うの、やめなよ。すごく綺麗なハクハツのメッシュなんだから」
私は面食らってしまった。

「ハクハツ？」

「そう、ハクハツ、分かった？」

本気で怒る友人を前に、私は思わず声を出して大笑いしてしまった。

「真剣なんだけど、ねえ」

友人の不平不満の声が聞こえる。

そんなことで怒るなんて驚いた。でも、私は気がついた。「そんなこと」こそ大切だったのだ。本当は、私が私を大切にすべきだったのに、それをおろそかにしていた。

私は友人に尋ねた。

「ねえ、私のハクハツは綺麗？」

「もちろん」

友人は笑顔で力強く答えてくれた。

使う言葉を変えるだけで、心に届く響きがこんなにも違うなんて、思ってもみなかった。

私はすぐに美容院へ行った。そして、ハクハツが綺麗に見えるようにしてほしい。とお願
いした。美容師さんは

「こんなに綺麗な白、人工では作り出せないんですよ。見せないなんて、もったいないんです」
と言ってくれた。そして、こっそり、

「あと、お母さん、実は心配してたんですよ。コンプレックスになったらどうしようって。前向きになつてくれて、本当に良かった」

と教えてくれた。

涙が溢れてきた。私は温かい人たちに恵まれていたのだと実感した。

髪のカットが終わり、鏡を見た私は驚いた。私の白い髪は、こんなに綺麗だったのか。隠されることなく表面に出たハクハツは、照明の光を受けてキラキラと輝いていた。

現在、私は高校二年生。幸運なことに、尋常性白斑は進行が止まった。あの日から、一度たりとも「ハクハツ」を隠したことはない。そして、これからも隠さないと決めている。それどころか、ハーファップや編み込み、シニヨンなど、白色をより美しく魅せるべく、様々なヘアスタイルに挑戦している。

かわいくなりたいたとか、美人になりたいだとか、悩みは尽きないものだけね。鏡を見るたびに思い出す。今までもらった、あつたかい言葉を。

そして、私にコンプレックスはない。私にあるのは、チャームポイントだ、ということ。

「まんまるの夜」

秋元 勇作

小学生の僕にとって、満月の日は特別で自然とテンションが上がる日だった。

なぜなら、母は満月の夜にだけ、決まって餃子を作ってくれたからだ。

ある日、不思議に思っ僕は母に聞いた。

「どうして満月の夜だけなの？」

すると母は、餃子の皮を一枚手に取り、窓辺にかざしてにこっと笑った。

「ほら、似てるでしょ。まんまるで、薄くて。お月さまって、餃子の皮みたいだから作るの」
そう言ってから、少しだけ真面目な顔になって、母は続けた。

「それにね、満月って、家族が仲良く丸く集まれる気がするのよ。だから、いつまでも一緒にいられますように、っていうおまじないでもあるの」

そんな母の餃子には、いつもレンコンが入っていた。しゃきつとした歯触りがあって、僕はその餃子が大好きだった。

ある満月の夜、僕は母の手伝いをしようとして、初めて餃子を包んでみた。

けれど、不器用な僕が作った餃子は、皮が破れて中身がはみ出し、餃子というより、宇宙船のような形になってしまった。

しょんぼりしていると、母はそれを見て声を上げて笑った。

「すごいね、宇宙船餃子の完成だ！」

そして、僕の頭を撫でながらこう言った。

「形が多少いびつでも、愛情たっぷりなら大丈夫よ」

そんな明るくて優しい母だったが、僕が高校生の頃、ガンを発症し、入院することになった。ある晩、病室のカーテン越しに差し込む月の光を、母はしばらく黙って見つめていた。

それから、お見舞いに来ていた僕の方を見て、静かに言った。

「今日は満月だね」

小さく息を吸ってから、母は続けた。

「ねえ、覚えてる？ あんたが宇宙船みたいな餃子作ったこと」

僕は微笑みながら、うなずいた。

「覚えてるよ。でももう作らないよ、あんな変なの」

そう言うのと、母はくすつと笑って、首を横に振った。

「いいじゃない。形がきれいじゃなくても。破れても、はみ出しても、ちゃんと包もうとし

た気持ちに残るでしょ」

一瞬、言葉を探すように間を置いてから、母は続けた。

「人も同じよ。うまくいかない日があっても、ちゃんと生きようとしてるなら、それでいい。丸くなくても、欠けてても、今日みたいな満月になる日が、また来るから」

そう言って、母は僕の手をそつと握った。

「明日もね、ちゃんと頑張りなさい。でも、無理はしなくていい。皮が破れたら、笑えばいいのよ」

母は、その年の冬に亡くなった。

次の満月の夕方、僕は一人で台所に立った。母のレシピ帳を開くと、餃子の作り方がそのまま残っていた。レンコンをすりおろし、少しだけ粗みじんにする。皮に具をのせ、端をつまむ。うまくひだが寄らず、思わず笑ってしまうほど不格好な餃子もできた。

それでも諦めず、一つずつ包んでいると、父が台所にやって来た。

「手伝うよ」

そう言って、僕の隣で、同じように不格好な餃子を包み始めた。

こうして何とか餃子を焼き上げ、僕と父と兄の三人で食卓を囲んだ。

熱々の餃子を前にすると、欠けていた食卓が、少しだけ明るくなった気がした。

「いただきます」と手を合わせ、一口頬張る。

思わず、「うまい！」と声が漏れた。

父がぼつりと言った。

「母さん、こういうの好きだったな」

僕はうなずき、窓の外の月をちらりと見ながら返答した。

「だからさ、また来月も作るよ。満月の夜だけ」

兄も目を潤ませながら、

「ちゃんと母さんの味になってるよ」

と言ってくれた。

僕は「そうだね」と答えて、また新しい餃子を口にした。

一口かじると、レンコンがしゃきつと鳴った。

懐かしい歯触りだった。

失ったものは、戻らない。

けれど、いつになっても、その餃子は、僕たち四人を、同じ場所へ連れていく。

「小洒落たコーヒー屋さん」

田村 奈実

車に乗り込み、ドアを閉めて荷物をチェックする。薄暗い車内で

「忘れ物はなかね？ 書類は持った？」

心配性の父が何度目かの言葉を繰り返す。長崎出身の十八歳の私は就職活動で面接を受けることになった。しかし面接時間が朝八時に博多でと、早朝でバスがなかったため父が博多の会場まで送ってくれることになった。

幼い頃に母も祖父母も亡くなり、父は男手一つで私を育ててくれたので、貧乏で家族揃って旅行や外出に出かけたことがなかった。だから父とのこのドライブはすごく新鮮で、緊張と共に内心ワクワクしていた。徐々に明るくなって露わになる田舎の代り映えのしない風景、じゃがいも畑や延々と続く田んぼに磯臭い海と牛フンの香りのする山。だけどその日はなんだか少しだけ違って見えた。全てが希望に満ち溢れてキラキラ、煌めいているような福岡に近づくにつれて、ひび割れていないアスファルトに高いビルが増えてきてどんどん都会になってくる。私は初めての大都会に、車の窓にほつぺたをくつつけて景色を食い入るよ

うに眺めた。

面接は八時からだったが、六時三十分には会場の近くに着いた。早めに着いたが車内にいても落ち着かない。朝食を食べていなかったこともあり、近くの飲食店に入ることにした。初めて来た大都会の、初めて入る地元にはない小洒落たコーヒー屋さんにとっても胸がドキドキした。手には少し汗が滲む。扉を開くとカランカランとベルが鳴る。中へ進むと苦そうなコーヒーが運ばれていくのが見えた。そして新鮮なひきたてのコーヒーの香りが鼻孔をくすぐる。カウンターには形の揃った瓶にコーヒー豆が並んでいて、コーヒー豆も種類によって色があるなにも違うのかと素人が一目見てわかるほどだった。

席に着くなりお冷が出てきて、

「お決まりでしたらこちらの鈴を鳴らしてください」

と女性の店員さんに言われた。チャイムではなく初めて見る、チリンチリンと鳴らすタイプの呼び鈴にセンスの良さを感じて、やっぱり都会はひと味違うなと鼻息が荒くなった。

「お前、お腹空いてなかと？」

と父が尋ねてきたので、メニューの中から一番安いサンドイッチ二個とドリンクのついたモーニングセットを注文する。飲み物はココアにした。六百五十円だった。少し高いと思ったのか父は自分も朝食をとっていないというのにコーヒーのみで、父のドリンクと合わせる

と二人で千円くらい。私は正直、高いなと思った。まだ最低時給が六百四十円くらいの時代だ。大丈夫なのかな、と子どもながらに心配した。なんとなく私は遠慮して

「そこまでお腹空いてないけん、サンドイッチ、一つずつ食べん？」

と提案した。父は

「ああそうね、それなら頂こうかね」

と、この時初めてニッコリ笑った。あまり見られない父の笑顔に提案してよかったと少しだけ嬉しくなった。卵とチーズとレタスの入ったサンドイッチ一個をゆっくり、時間をかけて丁寧に食べ終える。面接の時間が近づくにつれて緊張感が増してくる。

「私、そろそろ行こうかね」

席を立つとき、父の手が少し震えていた。その手で財布の中からしわくちゃな千円を取り出して会計を済ませ「ごちそうさまでした」と丁寧に辞儀をしていた。店を出ると

「奈美、笑顔よ、笑顔！ 自信を持って！」

と普段は仏頂面の父が私よりぎこちない笑顔で応援してくれたのでなんだか面白くなってしまつてふふふ、と笑顔になった。

面接では一番尊敬している人を聞かれた。私は今朝の父を思い出して、「父です。普段は仏頂面で無口ですが、いつも私のことを考えて、男手一つで育ててくれたからです」と答えた。

おかげで私はとてつもない倍率の面接に受かり、パン工場の正社員として働くことになった。仕事はというと肉体的にも精神的にもツラかったが、「合格した！」と伝えた時の父の喜ぶ顔を思い出すことで頑張ることができた。

あれから十六年。そんな父も昨年亡くなった。結局家族で出かけたのは数えるほどだったが、二時間弱のドライブと小洒落たコーヒー屋さんに、初めて見る父の緊張した顔と手の震えが今でも忘れられない。大人になると自然と小洒落たコーヒー屋さんに慣れるものだと思う。しかし笑えることに実は父も私もお互いガチガチに緊張していたのだった。大人になった今ならよくわかる。緊張した私のために頑張つて動揺してないふりをしてくれた父が愛おしい。

コーヒーは苦くて未だに飲めないが、コーヒーの香りはあの日を思い出せて大好きだ。

「アイの起源」

中川 泰明

僕の見ていた世界が、多くの人の見ていた世界と違っていたなんて。診断されるまでは気づかなかった。それが僕の当たり前だったのだから。

僕は二型色覚だ。茶色と緑色を区別することが難しい。その事実を知ったのは中学二年生。日常生活に支障が出るほどひどいわけではないけれど、パイロットなど一部の職業にはつけないらしい。

この年にして将来が制限されるというのは、なんとも変な感じだ。物凄い力が僕の運命を定めているような、抗おうにも抗えない感じ。

つまり、僕の目は少し変わっている。とはいえ、そこまで悲観的にもなりきれない。というのも、二型色覚の人は、明暗のコントラストに敏感なのだ。言い換えるなら、暗闇の中でも物のシルエツトを捉えやすい。

深夜にふと目が覚めた時、床に散乱するあれこれに躓くことなく部屋のドアまで辿り着けたのも、そのためだと考えれば合点がいく。

目をそっくり取り替えることはできないのだから諦めよう、と囁く自分と、決してうやむやにしている問題ではないよ、と抗議する自分が、自らの目を巡り胸中で諍う。あらが

とにかく僕は、かれこれ二年間、この目とどのように向き合うべきか探り続けてきた。

夏休みも中盤に差し掛かると、『戦後八十年』の五文字を見る機会が増えてきた。

「ほんまによう生きて帰ってきてくれたわ」

ある日、テレビを見ていた祖母が、徴兵された曾祖父の話を聞かせてくれた。

曾祖父は終戦後、日本に戻れなかった。シベリアに抑留されていたのだ。それは、二十歳から二十八歳にまで及ぶ。

終わりのない過酷な肉体労働。たちまち命を削り取っていく、シベリアの極寒。数分前まで喋っていた相手が、気づくと既に亡くなっていたこともあったらしい。凍傷の指を自ら切り落とした曾祖父は、想像を絶する厳しい環境を生き抜いたのだ。

「配給が少ないから、夜中に一人抜け出して、食べ物を探したって言うてたわ」

霜の降りた地面を踏み締める、ザクザクという音。鼻を刺す汗と垢の臭い。祖母の言葉は、テロップと共に流れる映像より、何倍も肉感をもって聞こえた。

「ひいおじいちゃんは、夜目が利いたんやで」

番組を切り替えながら祖母がぼつり呟いた。

「せやから真つ暗なシベリアでも、食べ物を見つけたんちゃうかな」

夜更けに収容所から抜け出す曾祖父の姿を思い浮かべた。ソ連兵に見つかれば命はない。呼吸を一度するだけで、心臓が縮むような心地がする。辺りを見渡し、爪に挟まる泥土を時折払いながら、蛙から虫、木の根まで、口にできそうなものは何でも掴み、ほつれたポケットに押し入れる。永遠にも感じられる夜を、幾十幾百と彼は耐え続けたのだ。

曾祖父が生きた抑留の日々と僕の生きている日常を、同じものだとはい底語れない。他人事だからと満足し、本当に知ろうとはしなかった、自分の浅はかさに失望を覚えた。

その夜、曾祖父の話を母にも伝えた。

「もしかするとひいおじいちゃん、あんたみたいな目を持ってたんかもしれないね」
相槌を打つばかりだった母が、おもむろに口を開いた。

「昔はほんまのことをなかなか言われへんかったんちゃうかな」

曾祖父は夜目が利いた。二型色覚の人は明暗のコントラストに敏感。遺伝する所もあるというから、確かにそうなのかもしれない。

曾祖父は、絶対に生きて帰る、ただそれだけを生き延びる糧にしたと語っていたそうだ。雪が吹き荒れるシベリアの地で、彼はどんな思いを抱え、生きたのだろう。

彼の生き様を考えると、窓の向こうの見慣れた風景でさえ、奇跡が重なった特別なものに感じられた。

「あなたは託されたんかもね。ひいおじいちゃんから」

この目には彼の人生が、遺伝子として刻まれている。まるでバトンのようだと思った。僕はこの目を受け継ぐと同時に、この目に刻まれた歴史をも受け継いだのではないか。彼が生きた日々を想い、遺したものを伝える。使命感に似た感情が輪郭をもって現れ、身体中を満たしていくかのようにだった。

僕が生まれるずっと前に、曾祖父は亡くなってしまった。写真の中の彼にどれだけ耳を押し当てても、声を聞くことは叶わない。

戦争中に彼は、どんな景色を見たいと願っていたのだろうか。

青春時代の曾祖父が望んだ美しい景色一つ一つを、この目に焼き付け生きていこう。

僕は初めて、自分の目を愛おしく思った。

佳作

愛媛県伊予郡松前町

「残香——プルースト、お前か」

原 徹

「父さん、彼女を紹介したいから、次の日曜日、家で待つというて」

三年前の七月のことだ。遠くの町で一人暮らしをしている息子から電話があった。いつもとは違うどこか緊張した口調に、決意めいたものを感じた。交際している女性がいるとは聞いていたが、どうやら身を固める決心をしたのだろう。その四年前に妻を喪った私にとって、久々の朗報だった。

息子がどんな顔をして帰ってくるのかと思うと、自然に笑みがこぼれた。だが、電話を切つて家の中をぐるりと見渡すと、途端に気が滅入った。埃の目立つ床、まだらに染みのついた窓ガラス、黒ずんだ網戸、テーブルに散乱した書類、そして、薄汚れたカーテン。妻が亡くなって以来、掃除らしい掃除をしたことがなかったのだ。この四年間、ほとんど来客のない我が家では、掃除をする差し迫った事情がなかった。いや、それ以前に、私にとって家の中の物はすべて、妻と暮らした証しにほかならない。そう思うと、埃や汚れでさえ掃除をするに忍びなく、いつも中途半端になってしまっていたのだ。

しかし、今はそんな感傷に浸っている場合ではない。息子の幸せを願う父親の使命として、徹底的に掃除することに決めた。

これまででは、特に目につきやすい箇所だけを箒で軽く掃く程度だった。だが今回は、目の届きにくい部屋の隅々まで掃除機をかけ、雑巾で拭いた。家具や建具、置物なども一つひとつ丁寧に汚れを取り、台所の油污れも落とした。書棚の本は、教養を窺わせるものに入れ替えた。不要品はすべて廃棄するつもりだったが、妻の遺品だけは何ひとつ捨てられず、ひとまず段ボール箱に入れて二階の寝室に隠すことにした。

妻の遺品を手にしても、以前ほどの切なさを感じられなかった。父親としての責任感が勝つたのだろう。家の中がきれいになるにつれて、四年分の心の澱までも消えていくように感じられた。

ところが、掃除が順調に進み、これならば予想より早く終わりそうだと気が緩んだとき、思わぬ伏兵が現れた。居間の棚で埃まみれになっていた妻の化粧品だ。

このとき余計なことは考えず、勢いに任せて段ボール箱に入れてしまえばよかったのだ。好奇心に負けて、恐る恐る化粧瓶を手に取り、蓋を開けてみた。すると、ふわりと甘い香りが漂った。その瞬間、まるで妻が傍にいるかのような錯覚に陥り、次いで、思い出が溢れ出してきた。

初めてデートをしたときの妻のはにかんだ横顔

——プロポーズの後、思わず抱きしめると小さく震えていた妻の肩

——仕事から帰ったとき、玄関まで聞こえてきた妻の笑い声

——そして、長く厳しい闘病から解放された妻の安らかな表情

懐かしさとともに、切なさや後悔、底知れぬ虚無感が込み上げてきて、苦しさのあまり床に座り込んでしまった。高鳴る鼓動、滴り落ちる脂汗、容赦なく暮れていく夏の午後。父親の責任感も、化粧品の香りの前では何の役にも立たなかった。

写真や手作りの人形といった有形の遺品はいつも目にしていたため、いつの間にか日常の景色に溶け込んでいたのだろう。しかし、化粧品の香りには無警戒だった。生前には、取り立てて意識もしなかったというのに。

高校時代、「嗅覚とは人間の感覚の中で最も儚いものだ。嘘だと思えば、今ここでカレーの匂いを思い出してみろ。どうだ、思い出せないだろう」と教師に教えられたことがあった。だが今回の出来事で、匂いには儚さゆえに、人間の感情を最も強く揺さぶる力があることを、嫌というほど思い知らされた。

息子が彼女を連れて帰省した日。二人が並んで仏前で婚約の報告をしているとき、ほんの一瞬だが、化粧品の香りが漂った気がした。

佳作

東京都品川区

「十月二十五日の筑前煮」

播磨 賢

高田馬場のワンルーム。深夜二時、潜水艦のような静けさだ。

唸るレンジを、どこか他人事のように眺めていた。中身は実家からの筑前煮。「クール便、送ったで。あんたの好きなもん、ぎょうさん詰めといたから」母からのLINEには、やたら元気なスタンプが添えられていた。

段ボールに詰め込まれた冷凍食品の山。母の体温が、霜の下でまだ息をしている気がした。四回生。東京に馴染んだ顔で生きている。だが、この定期便は、私が必死に纏った「洗練」という薄皮を、生活感という土足で踏み荒らしていく。特に癢に障るのは、無数の傷で白く曇り、出汁の色が沈着したタッパだ。蓋には黄色のマスキングテープに、『筑前煮』と躍るような字が書かれている。その文字の勢いと迷いのなさ。蛍光灯の下で見ると、自分の部屋がいつそう暗く感じられた。父は蕎麦打ち。母はヨガ。老いすら楽しむ二人の背中が、今の私には眩しすぎた。

間の抜けた電子音で我に返る。レンジの扉を開けると、醤油と味噌が焦げたような匂い。

その湯気の奥に、母がいつも使うレモンの洗剤の香りが、かすかに混じっている気がした。コンビ二弁当にはない、湿気の帯びた「台所」の空気だ。熱で歪んだ蓋を外し、湯気の立つレンコンを口に運ぶ。噛み締めると、歯の裏側に出汁の甘さが広がった。この味だ。

連日の面接とお祈りメールにすり減って、逃げるように帰省したあの日も、母はこれを作っていた。台所では、大量の野菜を刻む音。

「そんなに作ってどうするん。二人暮らしやのに」

刺々しく言った私に、母は里芋を鍋に放り込みながら、独り言のように言う。

「冷凍すんねん。一番美味しい時に時間止めて、閉じ込めとくねん」

「魔法みたいやろ。解凍したら、いつでもその時の『美味しい』に会えんねんで」

母は楽しそうに笑った。

その横顔が、少しだけ眩しくて、鬱陶しかった。保存しておきたい「今」なんて、二十二歳の私にはどこにもなかった。

だが今、冷めかけた里芋を箸で突いていると、流しに置いたタッパーの蓋が目に入った。テープの隅に、日付。

『10.25』

里芋が、箸の間から滑り落ちた。第一志望に落ちて絶望した、あの夜の翌日だ。誰にも会いたくなくて、電気もつけず、ベッドで膝を抱えていた十月二十四日の深夜。私が孤独に潰されていた数時間後、数百キロ離れた実家の台所には、早朝の湯気が立ちのぼっていた。母は超能力者ではない。私の不合格を知る術もない。けれど、私が泣き疲れて泥のように眠っている間、母は台所に立っていた。

冷凍庫を開ける。霜のついたタッパーを次々と取り出す。『ハンバーグ9・27』教育実習で失敗した日の翌日だ。『肉じゃが11・10』二次面接で落ちた翌日。偶然だ。そんなものは偶然に決まっている。母は何も知らない。私は何も言わなかった。電話ではいつも「順調やで」と笑っていた。あの頃、ほとんど毎日のように何かに躓^{つまず}いていた。タッパーの日付が、すべて符号するはずがない。

けれど。

私が電気もつけず、暗い部屋で膝を抱えていたその夜の数時間先。母の台所には包丁の音があった。

「一番美味しい時に、時間止めて、閉じ込めとくねん」

違う。母がしていたのは、時間の冷凍などではない。離れて暮らす息子が、どこかで泣いているかもしれない夜。母はそれを知らないまま、火を使い、鍋をかき回していた。タッパー

の曇り。無数の細かい傷。硬い根菜を詰め、菜箸で整え、冷えるのを待つて、蓋をする。何
度も何度も繰り返された、その手つきの痕跡。私が「貧乏くさい」と思っていた傷は、私の
知らないところで積み重ねられた時間そのものだった。

タッパーの文字が、滲んで読めなくなった。

あの夜、一人で泣いて、それで終わり。そう思っていた。

里芋を口に運んだ。冷え切った部屋で、熱い塊が喉を落ちていく。甘かった。喉が渇くほど、
塩辛かった。

深夜二時半。構わずLINEを開く。『美味しかった』と打ちかけて、やめた。震える指で、
短く打ち直す。『10.25のん、食べた。』送信ボタンを押す。既読はつかない。

『ありがとう』と打てばいい。指が止まる。一人で泣いた夜を奪われたくなかった。

空になったタッパーを洗う。キュッキュツと跳ねる音がする。水気を拭いて棚に戻し、そ
れから私は、冷凍庫を開けた。乱雑に積まれた容器を、奥へと押しやる。

次に届く荷物のために、場所を空けておく。

「バスとバス」

松尾 寛

少し前、八十歳になった母親がバスに乗って街に出た。

普段は原付に乗ってあちこちと行くのだが、私の住む町では七十歳になると百円でバスに乗れるサービスがあつて、母親はこれまで「自分にはまだまだ早い」と力強く抵抗していた。ところが昨今の物価高騰のご時世において「ヒャクエン」という言葉が独特の魔力をもつて彼女に作用したらしく、「一度使ってみよう」という気になったという。

その日は友達とまちなかへ出てお好み焼きを食べてきたらしい。三人のオババが得も言われぬ笑みを浮かべ、片手にコテ、片手にピースサインで大はしゃぎしている画像が送られてきた。よく見ると歯に大きな青のりがついている。

ただ、大はしゃぎの源泉はお好み焼きというより、バスに乗ったことだったようだった。プリンターで出力したバス路線図や時刻表とにらめっこしながら、今度は某時某分の某番バスに乗って某施設へ行くといいはじめた。「ここなら車で送っていくよ」と言っただけの反応は薄い。つまり、バスで行きたいのだろう。

世の中にはバスマニアに限らず乗り物マニアという人種がいて、彼ら彼女らは、乗って移動したり写真を撮ったりすることもさることながら、数字と文字で組み合わせられた暗号のよ
うな車体名を朗々と述べたり、時刻表をなぞりながらその通りに移動することにこだわって
いる人もいる。自分にもいくぶんかその傾向があるので、そのこだわりは理解できる。時刻
表を眺めていると、ときおり一日に数便しかない路線もあって、それらが連続する区間をう
まく乗り継げると、まるでドミノのような知的ゲームに成功したような感じになる。大昔こ
の話を最初に聞いたときは、どこが楽しいのかよく分からなかったが、聞くとやるとで大違
いだということがわかった。これにまさか母親がはまることになるとは思ってもよらなかった。

そのひとつの結実が例のお好み焼き屋で撮った画像というわけだが、改めてこの画像を見
ていると、別に顔を変な光沢で白くしているわけでもなければ、背景も言ってしまうとただ
のお好み焼き屋。切りわけられたお好み焼きが特に美しく盛られているわけでもなければ、
黒い鉄板が「映え」になっているわけでもない。なんてことのない画像だが、見れば見るほ
どよくできているような気がしてきた。そう思いながら、この夜に見た夢は白と緑のコント
ラストが自分に笑いかけてくるものだった。

翌朝、お世辞と正直な気持ちが入り混じりながら、「昨日のあれ、いい画像だよ」と感想
を言うと、母親は「実は」と返してきた。なにに。母親はいつの間にか画像を投稿するS

NSをはじめていて、家に咲いた花、教室でつくった手芸、例のバス旅やらを投稿しているのだという。「実はこの画像、SNSにアップしてバズった」と、やたらとカタカナ語の多いことを言ってきたとき、自分は、いろんな意味でぎよつとなった。目の前にいる母親が一瞬Z世代に見え、そしてしばらくして、ネットでの炎上風景が頭に浮かんできた。もしかすると、あの青のりがバズったのか。

気まずい沈黙だった。ところが自分の微妙な表情を見透かしたのか、母親は続けてこう言う。「全世界に見せるとかりテラシーのないことはせーへんよ。友達にしか見せない設定にしてるし」そう言って見せてもらった母親のアカウントは以前飼っていた犬の名前だった。友達は六人。そして例の画像には、その六人全員が「いいね」を押していたのだった。これが母親の言う「バズ」なのだった。

「台所の時間」

伊藤 光映子

あの大晦日まで私は祖母を「おばあちゃま」以上に見たことがなかった。

「ごはん作るの手伝って！」

祖母は二階まで声を響かせて呼んだ。毎週土曜日、祖父母の家に通う私たちきょうだいは、決まって料理のお手伝いをしていた。けれど私は、そのお手伝いがあまり好きではなかった。姉のようにふざけたり冗談を言ったりするのが得意ではなく、どこか祖母との会話がぎこちなかったからだ。

そんな中いつも一緒に手伝っていた姉が受験勉強で部屋にこもるようになり、私と祖母と二人だけで台所に立つことが増えた。二人きりになる機会がほとんどなかったせいで会話が弾まず、どこことなく気まずさを感じた私は、いつしか自分までも部屋にこもることが多くなっていた。しかし、その年の大晦日、そんな意識ががらりと変わった。

毎年祖母と母で行っていたおせち作りに、母が姉と弟の受験のために参加できなくなったので、代わりに暇な私が派遣されることになった。十二月三十一日。食卓には漆黒に金の模

様が入った漆の重箱が、差し込む光を受けて静かに輝いていた。祖母と完全に二人きりで料理をする機会は久し振りで、少し緊張していた。

祖母は昆布巻きのニシンを切って、私はそれを昆布で巻く。台所が甘じょっぱいニシンの香りで満ちていた。毎年当たり前のように食べているおせちが、すべて祖母の手で作られていると思うと、その腕前に改めて感心した。

「なんでおばあちゃまはそんなに料理がうまいの？」

他愛のない会話の流れで、私はふと問いかけた。

「よくね、母と一緒にご飯作ったりおせちを作ったりしながら教えてもらったからよ。母は厳しい人だったけど、料理の腕は確かで、いっぱい教えてもらったからね」

初めて聞く、祖母とその母の話だった。そうだったんだ。だから祖母は、レシピ本を見なくてもあんなにおいしいごはんが作れるのか。それまで「おばあちゃま」としてしか知らなかった祖母の昔話は、一人の等身大の女の子のエピソードのようで、胸をつかまれた。祖母の新しい一面を知った気がした。

その後も、祖母の五人もいるきょうだいのこと、大学進学で上京したこと、私の父と叔母の子育てエピソードを、祖母は次々と語ってくれた。気づけば、おせちはすべて完成していた。今までのぎこちなさが、嘘のように消えていた。こんなにも会話が弾んだのは、初めてだった。

それまではなんとなく感じていた祖母との距離がふっと縮まったように思えた。

それからというもの、祖母と料理をするときは、いつも会話に花が咲く。学校での悩みを聞いてもらったり、時には泣きながら親への不満をこぼしたりすることもある。少し前まで気まずさを感じていた祖母は、今ではそつと心に寄り添い、温かい言葉をかけてくれる味方になった。

そして、来年もきつと同じ香りの中でおせちを作る。祖母と過ごす台所の時間は、私の中で静かに積み重なり、大切な思い出となっていく。

「小さなカップケーキが教えてくれたこと」

稲村 瑠華

世界の幸せは、遠い国の大問題だけで測れるだろうか。アメリカの私立高校に一年間留学したとき、私は十六歳の誕生日を盛大なホームパーティーで祝ってもらった。三十人以上のクラスメイトや近所の人が集まり、テーブルには大きなケーキと色とりどりの飾りが並んだ。歌やゲームでにぎわい、夜が更けても笑い声が絶えなかった。「スイートシックスティーン」は大人への一步として特別に祝われる行事だという。私はその華やかさに圧倒されながらも、これこそが「世界の当たり前」なのだと信じて疑わなかった。

しかしその数か月後、親友のケスラの誕生日に招かれたとき、私は別の現実に出会った。彼女は家の中に私を入れず、近所の公園で二人きりで過ごそうと提案した。芝生に腰を下ろして話していると、急に雨が降り出した。すると彼女の母が三十分も離れたショッピングモールへ車で連れていってくれた。買い物をするわけではなく、ただ屋根の下で雨宿りをしながらおしゃべりするためだった。別れ際、ケスラはスーパで買った小さなカップケーキを差し出した。「今日は来てくれてありがとう」それが、彼女にできる精一杯のおもてなしだった。

華やかなパーティとは正反対の、控えめでさやかな誕生日の姿に、私は胸が熱くなった。

帰宅後、ホストマザーが言った。「この学校は裕福な家庭が多いけれど、全額奨学金で通う生徒もいるのよ」そのとき初めて、ケスラの笑顔の裏にある事情に気づいた。私は毎日カフェテリアで昼食を買っていたが、彼女はいつも小さな手作りサンドイッチを持参していた。お金を払って食事を買えないことを、明るさと気遣いで上手に隠していたのだ。さらに、留学生を受け入れるホスト家庭の中には経済的に余裕のない家庭もあり、昼はフルタイムで働き、夜はスーパーでシフトに入りながら家計を支えていると知った。留学生を迎えることが、そのまま生活を支える収入源になることもあるのだ。私の「当たり前」は、誰かにとっては決して当たり前ではない。世界の多様さと不平等を、初めて身近に実感した瞬間だった。

それから私は、学校で行われていたフードバンク活動に足を運ぶようになった。最初は恥ずかしさもあり、ほんの少しだけ食品を寄付した。しかし匿名で箱に入れると、名前ではなく物だけが静かに届く仕組みが、受け取る人の尊厳を守ることに気づいた。次第に私は保存食や日用品を少しずつ集め、自分のおこづかいから買い足して寄付するようになった。誰が必要なときに、見られることなく受け取れることの大切さ。小さな行為でも積み重なれば支えになること。寄付をするたびに、私はあの日のカップケーキを思い出し、心に温かさが広がった。

世界の幸せは、遠くの国から届く大きな支援だけでつくられるのではない。となりの友だちの心に雨が降る日に、そつと差し出される一口の甘さからも始まる。ケスラが手渡してくれたあのカップケーキは、私に「人を思いやる力は規模ではなく心から生まれる」ということを教えてくれた。小さな贈り物に込められた気持ちは、時間がたつても色あせない。あの日の小さなケーキのやさしい味を決して忘れない。

「お兄ちゃんの意地」

大久保 まこ

「お兄ちゃんに任せとけ」この言葉ほど、私を安心させてくれる言葉はない。私には六歳年上の兄がいる。自由で、少し傲慢で横暴で、それでいて優しい。王様みたいに自己中心的なところもあるけれど、なぜか憎めない。むしろ、そんなところも含めて、私は兄のことが大好きだ。周りからどう見えるかは分からないが、私にとって兄は誇らしい存在であり、自慢のお兄ちゃんである。

兄は、私や弟の前で弱さを絶対に見せない。テスト前や大会前などで緊張しているときでも、自分のことより私たちを優先する。忙しくても話を聞いてくれ、冗談を言って場を明るくしてくれる。そんな兄の姿を見て、私は「強い人」というのはこういう人なのかもしれないと思っていた。特に印象に残っているのは、兄が留学に行く前のことだ。留学を控えた兄は、いつもより少し落ち着きがなく、不安そうに見えた。知らない土地で、頼れる人もいない環境に行くのだから、怖くないはずがない。普段は自信満々で堂々としている兄が、珍しくそわそわしている姿を見て、私は内心とても心配だった。

もし私だったら、自分で決めたことでも不安で泣いてしまい、周囲に気を配る余裕など持てないと思う。しかし兄は違った。弟には「家のこと頼むね」と軽く言い、私には「弟が助けてくれるから、ちゃんと勉強するんだよ」「困ったことがあったら、いつでもLINEしろ。なんでも任せとけ」と、いつもの調子で優しく声をかけてくれた。その言葉に、私は少し救われた気がした。私は思わず「怖くないの」と聞いた。すると兄は、「怖くないって言ったら嘘だけど、お兄ちゃんは大丈夫だよ」と、特に根拠があるわけでもなさそうなことを言って笑った。その笑顔を見た瞬間、私は胸が熱くなった。兄も不安なのに、それを隠して私たちを安心させようとしているのだと気づいたからだ。

兄本人の本当の気持ちは分からないが、きっと兄はいつも意地を張っているのだと思う。「弟や妹の前では、かつこ悪いところを見せない兄でいたい」という、少し子どもみたいな意地なのかもしれない。他の人がしていたら幼稚だと笑ってしまうかもしれないが、私にとってはその意地が何よりも頼もしい。

私には、いつもかつこいい兄がついていて、守ってくれて、応援してくれている。私のお兄ちゃんは、世界で一番頼りになる、意地っ張りで子どもみたいなお兄ちゃんだ。きつとこれからも私は困ったときに兄を頼ってしまおうだろう。なぜなら、私は兄の「任せとけ」という言葉が、これから先もずっと大好きだからだ。

「姉の叫び」

出島 せいな

私は三人姉妹の長女である。長女の立場は世間では誤解されがちだ。

こちらが長女だということを知った途端「私は末っ子なの。お姉ちゃんって得よね」とか「きょうだいがいるのが羨ましい。妹はさぞ可愛いでしょう」なんて言われる。実態をよく知らない人の勝手な想像にすぎないと思う。

一番上は楽だ、得だというような風潮がある。そう言われるたび、私は心のなかで「でも」と叫んで反論する。

まず、一人っ子だった時期について詳しく追及される。確かに、私は妹が生まれるまでの二年間、一人っ子だった。たったの二年間だ。しかも、幼少期どころではない、幼児期の話だ。物心ついたときの記憶には視界の中にするではつきりと妹が映りこんでいる。覚えてもないときの体験を持ち出されて「長女だけずるい」と糾弾されても、文字通り記憶にないのだ。記憶にないだけで事実ではあるから余計に扱いづらい。

新しい服を買ってもらえてお下がりがない、とも言われる。確かに小さいときはそうかもしれない。だが、身長が伸びた最近はもっぱら父の洗濯して小さくなったジャージばかり着ている。気に入っているからそれでいいのだが、特別待遇だと言われると首をかしげてしまう。それを言ってしまうえば、長女と次女で趣味が違いすぎるあまり、服を買ってもらえる次女もそう変わらない。

けんかするときだって、年上が一番強いというのは間違いだ。確かに、暴力を行使するのなら最強だろう。だが、そんなことをしようものなら、母がすつとんできてこつてり絞られる。母は家族という小さな国の君主である。日頃お世話になっている平民では敵わない。よって、暴力という唯一の武器は封印される。

妹たちの口喧嘩の強さを舐めてはいけない。丸腰ではボコボコにされる。こちらがなにかな言おうものなら、十倍ぐらいになって返ってくる。たまったものではない。こつちが泣きたいくらいなのだ。でも、立場上姉が妹に泣かされるわけにはいけないので、唇を噛み締めながら震える。

自分から大変なことを増やしてしまう羽目になるのも長女の性だ。なんだかんだ言っても

妹が可愛く、心配なのである。遊びに行っても、学校に行っていても、このお菓子は次女が好きそうだから買って帰ろうとか、この本は三女が好きそうだから借りて帰ろうとなって、荷物を増やす。

妹たちの反応が薄かったときに残念な顔をして、「自分のおせっかいのくせに」と言われる。おせっかいとはいえ、少しは喜んでもらいたいものである。

だが、妹はわかっている。自分が少し甘えたら姉はイチコロだということを。姉だけが知っている。妹の一番可愛い表情を。

だから、このポジションは誰にも譲れない。

「普通じゃないけれど」

仲 陽菜子

時々、中学時代の知り合いと最寄り駅で会う。全日制高校に通う知り合いから聞く話は、自分の生活にはないことばかりで、新鮮で面白いと思う反面、自分は普通じゃないんだなと考えるしまって、ふっと気持ちが暗くなる。

中学生生活の半分以上を校内フリースクールで過ごした私は今年の春、通信制高校へ入学した。学校へ行つて授業を受け、期限までにレポートをこなす生活を送っている。通信制というと、家から出ずオンラインで授業やレポートをやるというイメージが根強い。しかし通学コースを選んだ私は、週に二、三日学校へ登校する。自分で授業を選択して時間割が作れることや、全日制のような校則や制服がないことも手伝って、なんだか大学生のような生活をしているなど思う。常に自分で考えて行動しなければいけないことに不安を感じるときもある。けれど、何時間も狭い教室の中で、たくさんの人と過ごさないといけないこと、常に周りに合わせて、周りのことを考えて行動しないといけないことに窮屈を感じていた私には、それらがほとんどない通信制高校は夢のような学校に思えた。実際入学してみると、入学前

に思い描いていたことと違うことも、大変なこともたくさんあった。でもそれ以上に、好きな格好で過ごすことができて、自分のペースで学べることが楽しかった。教室で授業を受けていると、普通の学生に戻れたような気がして、とても嬉しくなった。

しかし、どんなときも常に

「自分は世間の普通から外れている」

という意識が離れないことは、通信制へ入学して強く感じたデメリットだと思う。

同窓生の中で通信制を選んだのは私一人だけだった。卒業直前にフリースクールの先生と話したとき、

「通信制に進むことに、誇りを持っていてほしい」

そう言われたことを覚えている。後の春休みの間にも、自分の選んだことは間違っていないんだ、誇りとやらを持たなくてとはと、何度も自分に言い聞かせていた。

だけど、それ以上に同年代の姿は眩しくて、すぐに私を焦がし尽くした。

見たことのない制服を着て、友人と楽しげに影をのぼして歩く姿。四方八方から聞こえる話し声や笑い声。周りがちゃんとやれることを、自分はやれていないんだと知って、私の中に強い焦りが生まれた。いくら言い聞かせても、どうしても、「羨ましい」という想いはなくならなかった。

どうしようもなくなったとき、私は出掛けた。一人で、行ったことのない場所へ行った。授業のない平日、電車で揺られたり、自転車漕いだりして、色々な場所へ行った。

目についたお店を覗いてみたり、気になった映画を朝一番で見えたり、なんにも考えずに公園の中や、見慣れない街の景色を見て歩いたり。素敵だなと思ったものには、母から借りたカメラを向けてシャッターを、パチリ。そうして日々募る暗い気持ちを誤魔化すうち、私がこうやって気ままに出掛けられるのは、通信制に進んだからなのではと思うようになった。もし全日制に進んでいたら、今みたいに普通じゃないことに悩むことはなかった。きっとこの悩みがなかったら、今よりもっとずっと、楽に生きられたと思う。でも全日制に進んでいたら、この悩みが私の中になかったら、知らない街を一人で歩く楽しさを、上手く風景を写せたときの胸の高鳴りを、私は一生知らなかった。今、私に与えられたこの時間は、通信制に進めなかったら絶対に分かることのなかった、とても貴重で、素敵なものだ。そう気付いたとき、私はやっと、あのとき先生が言った「誇り」とは何なのか、その姿がほんの少し見えた気がした。

もうすぐ、入学して一年が経つ。

相変わらず、時々学校へ行き、カレンダーとにらめっこしつつ、レポートをこなす日々を送っている。

やっぱり普通の高校生への憧れはなくならないし、自分を恥ずかしく思うときもある。心の中でくすぶるこの想いは、どうしたって消すことができない。

だけど、私には普通の高校生にはない、からっぽだけど自由に使える時間がたくさんある。普通になれない分、その時間を使って、色々なことを経験しようと決めた。楽しいことはもちろん、苦なことからも逃げず、気になったことには全力で挑む。その経験を、私の想いと一緒に、こうやって原稿用紙に綴っていく。きっと普通ではないけれど、これが私の高校生生活だ。

自分のした選択を恥じず、心から誇ってこれからも生きていけるように、今この瞬間から精一杯努力をしていこうと思う。

「足の指と人の話」

向井 こなつ

私の家には犬がいる。ハンディーサイズのタイプだ。母は犬を抱え散歩に行くようだがハンディーサイズなのに暴れるものだから母は犬を両手で抱える。母の手はふさがっているが「母」という生き物は目についた気になる物はその時に片付けないといられないようだ。玄関にある少しずれた靴。母にロックオンされた。「これ片付けて」と私が呼ばれるのか？

……もしや、今日は早くも奥義発動か？

キター！ 母の奥義、必殺器用な足の指！ それはそれは器用にまた踊り子が踊るように美しく足の指で靴を挟み、さっと定位置に揃える。私がやったらお行儀が悪いと叱られるはずなのに、なぜか母は当然のような涼しい顔でこれをやる。靴だけではない。犬のトイレシートのズレ、毛布の角を揃える、微妙に離れたスリッパを自分の方に引き寄せる、暇な時に私のズボンのすそを引っ張って遊んでみるなど、母の足の指は多岐にわたって活用されている。

そんな母の足の指に私はたまに念を送る時がある。そう、何かで叱られた後だ。この時だけは「つれつれー！ 足の指つって苦しめ」と本気で思って念を送っている。おそらく、こ

の念は母にバレている。こういう時、母はだいたい私の顔を見ていつもよりもっと涼しい顔で奥義をより多く繰り出す。いつか苦しんでほしいと叱られていない今もひそかに思っていたりするのだが、その日は突如やってきた。

二〇二六年一月一日。母の実家にお正月なので遊びに行った。母は母であるけれど、自分の実家ではたまに娘に戻っている時がある。その娘に戻っている時に事件は起きた。母の実家には床置きのカスファンヒーターがあるのだが、その前で毛布を被り、娘と化した母がゴロゴロしていた。ヒーターと毛布で少し暑かったのだろう。母は足の指を毛布からちよこんと出し、それでスイッチを切ったのだ。母がいつも通り涼しい顔をして毛布の中に足を戻そうとしたその時……。『やだ！ ねえ、ちよつと！ まだそんなことやってるの？ やめなさいよ』と母の母である、私にとっての祖母の登場だ。母は少し気まずそうに「はい」と返してまたゴロゴロし始めた。母が小言を言われているのを見て、私のこの念を送るという行為が実を結んだような気がした。

母のゴロゴロ中、祖母に母の足の指について聞いてみた。「昔からとにかく足が器用で小さい時は人生ゲームを足の指でやるっていうのを特技にしようとしてたのよ。もうちよつとマシなことを特技にしてほしいもんだよね」と祖母は笑いながら話していた。これを母に話すと「そうは言うけどさ、自分だって人の話を適当に聞いて、何回話しても初めて聞いたって

////////////////////

いうつつこみどころがある奥義を持つてくるくせに！ 私のは実用的だから私の方がマシ」となぜか誇らしそうに言ってきた。確かに私の祖母は人の話を聞いていない。祖父に「前にも話したけど」とよく言われている。私からすると、どちらも大して変わらない。私はもっと普通だ。こんな変な特技や奥義は持ち合わせていない。ただ絶対に忘れてはいけけないのは、私にはこの二人の遺伝子が組み込まれているということだ。

第3回 有吉佐和子文学賞 概 要

■応募資格

中学生以上

■募集内容

エッセイ

※テーマは問いませんので、ご自由にお書きください。

■応募方法

郵送、持参または応募フォームのいずれかで応募してください。

- ・郵送・持参の場合は、作品に応募用紙を添付してください。
- ・持参の場合は、市役所閉庁日を除く、平日8時30分から17時15分の間に市役所10階文化振興課の窓口へ直接お越しください。
- ・応募フォームの場合は、フォームに必要な事項を入力し、作品データを添付してください。

■応募締切

令和8年1月30日（金）

- ・郵送の場合 必着
- ・持参の場合 17時15分まで
- ・応募フォームの場合 当日受付分

■賞

入賞は最優秀賞1編、優秀賞1編、佳作5編、奨励賞若干数とし、入賞者には、表彰状および副賞として以下の各金額相当の図書カードを贈呈します。

最優秀賞	1編	50,000円
優 秀 賞	1編	30,000円
佳 作	5編	10,000円
奨 励 賞	若干数	5,000円

※審査結果により、該当作品がない場合があります。
※奨励賞は中学生および高校生の作品のみ対象です。

■発表

入賞者に直接通知するとともに、和歌山市ホームページで5月中旬頃に結果を公表する予定です。

※入賞作品発表時には、氏名・居住地（市町村まで）を公表します。（中学生・高校生の方は学校名・学年も併せて公表します。）

■選考

有識者等からの意見聴取を経て、受賞作品を決定

【意見聴取員】

恩田 雅和	有吉佐和子記念館 館長
河野 和憲	情報通信業（出版業）
坊 美生子	有識者
小杉 栄樹	教育研究会国語部会

※職域は意見聴取当時のものです。

■応募規定

- ・応募は1人1編に限ります。
- ・A4判400字詰め原稿用紙を使用し、縦書き2枚以上5枚以内で作成してください。パソコン等で執筆される場合はA4判用紙に20字×20行の縦書き2枚以上5枚以内で作成してください。
- ・原稿用紙の1行目に「題名」を記載し、2行目から「本文」を書き出してください。原稿用紙には題名と本文以外は記入しないでください。
- ・応募用紙に、応募作品の題名、氏名、住所、電話番号、生年月日、E-mail アドレス（お持ちの方）、中学生および高校生の方は学校名・学年、今回の募集を知った方法を明記のうえ、作品に添えて提出してください。
- ・団体で応募される場合は、和歌山市ホームページにある、団体用応募用紙および応募作品一覧に必要な事項を記入し、ご応募ください。
- ・作品は日本語で書かれた本人のオリジナル作品で、未発表のものに限ります。AI（人工知能）文章生成ツールによる作品、他人の作品等を流用した作品は選考対象外になります。
- ・第三者の権利を侵害する作品、第三者を誹謗中傷する作品の応募は不可とします。
- ・他の文学賞との二重投稿および過去に入賞した作品の応募は禁止します。

■応募上の注意

- ・応募後の作品の変更・差替えは認められません。
- ・応募作品の返却はいたしません。
- ・入賞作品の著作権は和歌山市に帰属し、和歌山市ホームページや SNS 等に掲載する場合があります。
- ・選考に関するお問合せには一切お答えできません。
- ・作品の到着確認のお問合せには対応できませんので、郵便の追跡サービス等を利用し、各自でご確認ください。
- ・応募に関する個人情報（「有吉佐和子文学賞」に関する業務以外では使用しません）。
- ・募集要項に違反した場合は、受賞後であっても賞を取り消す場合があります。

■応募先および問合せ先

〒640-8511

和歌山市七番丁23番地

和歌山市文化振興課

有吉佐和子文学賞係

Tel：073-435-1194



▲ホームページ

■応募状況

応募総数 1,314 編

中学生は個人応募を含め、市内3校、県外15校から応募があり、高校生は個人応募を含め、市内2校、県外36校から応募があった。

年齢別では、10代からの応募が最も多く327人であった。90代までのすべての年代の方から非常に多くの作品応募があり、最年少は中学1年生、最高齢の方は94歳の方であった。

47都道府県すべてから応募があり、海外からの応募はアメリカ、オランダ、ドイツ、マレーシア、モンゴルからであった。

■応募数内訳

応募区分		和歌山県内			県外	海外	未記入
		市内	市外	県合計			
一 般	996 人	70 人	53 人	123 人	868 人	5 人	0 人
高 校 生	191 人	3 人	2 人	5 人	186 人	0 人	0 人
中 学 生	127 人	3 人	0 人	3 人	124 人	0 人	0 人
合 計	1,314 人	76 人	55 人	131 人	1,178 人	5 人	0 人

■年代別内訳

年代	人数
10 代	327 人
20 代	92 人
30 代	93 人
40 代	121 人
50 代	171 人
60 代	254 人
70 代	196 人
80 代	50 人
90 代	6 人
未記入	4 人
合計	1,314 人

■地域別内訳

地域	人数
北海道・東北	71 人
関東	605 人
中部	158 人
近畿	337 人
中国・四国	71 人
九州・沖縄	67 人
海外	5 人
合計	1,314 人

■表彰式

日時：令和8年6月7日（日）13時30分から

会場：和歌山市立有吉佐和子記念館

第3回 有吉佐和子文学賞 入賞作品集

編集・発行 和歌山市

〒640-8511 和歌山県和歌山市七番丁2-3番地

TEL 073-435-1194